

はじめに

地域社会との持続的な連携関係を通じた学生の学びを

生活科学学科長* 内山 秀樹

ご縁をいただいて本学に着任させていただいたのが2005年4月。まちづくりを専門とする教員だということで、翌年3月に森田地区の若者のまちづくりグループに「住民主体の新しいまちづくりの動き」と題してお話をさせていただいたのが、地元森田地区との関わりの始まりであった。

奇しくも前職のまちづくりコンサル時代に関わった森田北東部地区土地区画整理事業による宅地造成が動き始めた頃で、リーダーの方から「新しい住民の流入が予想される。新旧住民が共有できるまちづくりの目標を持ちたいのだが。」という相談を受けた。「ならば住民の思いや夢を集めて森田の将来ビジョンを」との提案に地元が応え、検討ワークショップに取り組んだのが2006年6月。翌年にはその実現に向けて「歴史散策マップ」、「街路景観」、「特産品開発」の3チームが動き始めた。

さらに、本学との安定的な連携関係を確立できないかとの相談を受け、本学との連携協定締結に発展したのが2010年。これを契機にまちづくり分野以外の先生も含め、森田地区との継続的な関係が始まった。まちづくりについて挙げるならば、「夢まつり～夏物語」、「同～冬物語」と称して学生の参加が定例化していった。さらに、もりたまつりに合わせた「エコキャンドル」、2017年からはマイアクアでの「もりのわフェスタ」、2022年にはJR森田駅活用検討ワークショップを経て駅活用社会実験と展開していった。

これまでの取り組みで一貫してきたのは、地域の課題解決を通じて本学が地元森田地区に寄与すること。一方、学生もその取り組みに参加、参画させていただいて、机上の学びでなくリアルな地域社会との関係、真剣勝負から学んでもらうことを基本としてきた。例えば、学生が実行委員としてイベントのチラシを担当することに

なった場合、地元の広報物配布日が決まっているため、作業の遅れは許されない。授業では寛容にみてくれるかもしれない「できませんでした」という言い訳はあり得ないことを体感する機会としてきた。このような機会でも前向きに汗をかいた学生は一段階成長して卒業していった。

一方、学生がある地域に関わって苦い経験もある。「デザインを学んでいる学生さんだから、チラシの編集ぐらいいざっとできると思っていたのに」という苦情。しかし、手を貸してしまっただけでは学びにならない。辛抱強く対応させることを基本としてきた。このことがあってから、初めてお付き合いする地域や団体には、「学生はまだデザインを学び始めたばかりのひよこです。胸を貸すつもりでお付き合いいただけるなら…」と最初にお断りすることとしている。また、地域によっては「若者が参加してくれるだけで賑やかになる」ということで参加協力を要請されることもあるが、それだけが求められる参加は避けてきた。

高等教育機関の地域貢献という面では、これらの取り組みを進める上で教員の専門性にに基づくアドバイスで発揮することが前提になるが、このように学びのフィールドとして地域社会と付き合っていくには、お互いの信頼関係を構築した上でのギブ・アンド・テイクが重要と考える。

最近、県外大学が県内自治体との連携協定締結に積極的であるが、名ばかりの連携では？と思うものも少なくない。すでに永平寺町では幼児教育分野で継続的な連携が始まっているが、最も身近なステークホルダーである地元森田地区とのこれまでの連携関係をベースに福井市、県内へと広げ、真の社会貢献を通じてリアルな社会での学生の学びのフィールドとすることを期待したい。

* 2023年3月時点の役職です